

目的・目標	<ul style="list-style-type: none"> ● 継続的・計画的な交流及び共同学習を教育課程に位置づけ、多様で柔軟な学びの場を創出する。 ● 副籍制度や教員の併任発令等を活用し、地域全体での教員の相互連携により、多様な教育的ニーズに応じた体制を構築する。 ● 設置者（府・市）を越えた連携モデルを確立し、地域・府内へ波及させる。 			
-------	---	--	--	--

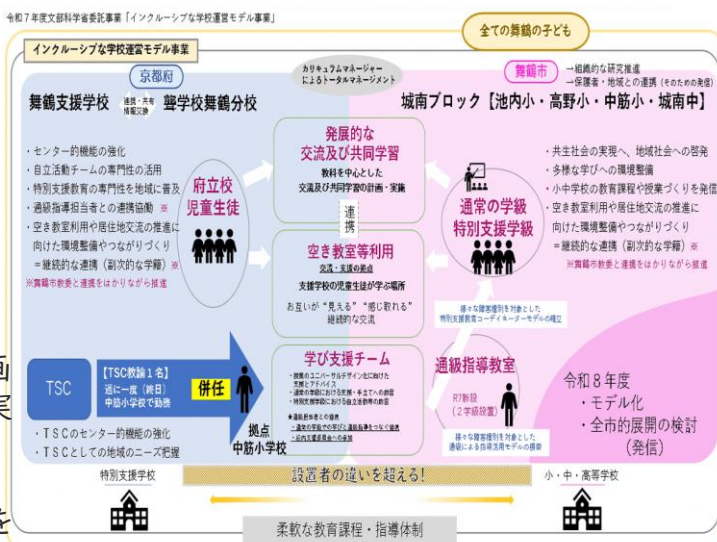
学校運営連携校	府立 舞鶴支援学校①（知的障害・肢体不自由） 聾学校舞鶴分校②（聴覚障害） 舞鶴市立 池内小学校①②・高野小学校①②・中筋小学校①②・城南中学校①	隣接型	カリキュラム・マネージャー	元府立特別支援学校副校長
---------	---	-----	---------------	--------------

事業1年次の取組概要、成果・課題

「知り合う」をテーマに、教科指導や行事等を通じた交流及び共同学習を展開した。また、教職員間では、情報共有体制として設置者を越えたオンライン（Teams）での連携体制を確立するとともに、既存の研修機会を相互活用して専門性を共有した。そうした取組を通じて、交流及び共同学習の拠点として小・中学校の空き教室等を活用する取組や、年間指導計画を持ち寄り、次年度の計画を共に検討する取組ができた。一方で、「副籍」や「併任」等の体制整備に向けた具体的な検討・提案には至らなかった。また、共同学習の充実や双方の教員で目標や評価を共有し、一体的に授業づくりを進めることについても課題が残った。

取組概要（事業2年次）

- **教育課程に明確に位置づく交流及び共同学習**
 ⇒ 理科や音楽、図工、理科や社会（生活）等の各教科等のねらいや年間指導計画に基づいて単元計画を作成して共有
 ⇒ 各教科等の目標や内容、単元のつながりを大切に教科等を軸とする共同学習を深化
- **双方の教員の柔軟かつ日常的な連携による一体的な授業づくりとチーム・ティーチング**
 ⇒ 昨年度構築したTeamsでの連携システムを基盤として、柔軟かつ日常的に双方の教員が連携して授業づくりを進め、一体的なチームとして交流及び共同学習を実施することを重視して取り組んだ。
 ⇒ また、双方の教員が目標や手立てを共有し、共同で授業づくりを進めるためのツールとして「つながるシート」を新たに導入。共同での授業づくりのシステム化を図った。
- **併任発令による設置者の違いを越えた一体的・伴走的な特別支援教育の体制整備**
 ⇒ 特別支援学校の教員が週に一度小学校に勤務し、通常の学級におけるUDL視点での授業改善や特別支援学級での自立活動の指導、通級指導教室と通常の学級との連携に直接参画
 ⇒ それぞれの専門性を生かした指導・支援を展開し、地域の学校における特別支援教育の充実に向けた体制構築の研究を推進。
- **学び支援チームによる柔軟かつ伴走的な地域の小中学校の特別支援教育の充実**
 ⇒ 併任勤務の小学校を拠点に「学び支援チーム」として小・中学校のニーズに応じたメンバーを組織し、柔軟かつ伴走的な支援を行う取組を通して、特別支援学校のセンター的機能の一層の充実を図った。



令和7年度事業概要図より

① 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

◇ 教育課程や教科等の目標・内容に明確に基づき、地域の小中学校と特別支援学校の教員がチームとして一体的に子どもの資質・能力を育成することを通して、地域全体の特別支援教育の充実につながる授業を目指して



子どもたちの変容・成果

- 授業の質の向上(多様な学び方、個別的な目標、UDL)
- 心のバリアフリーの育成(対話的な学びを通じた多様性の尊重・受容)

教職員の資質向上

- 小中学校：特別支援教育・UDLの視点からの授業改善
- 特別支援学校：教科の目標・内容に基づく授業改善と評価

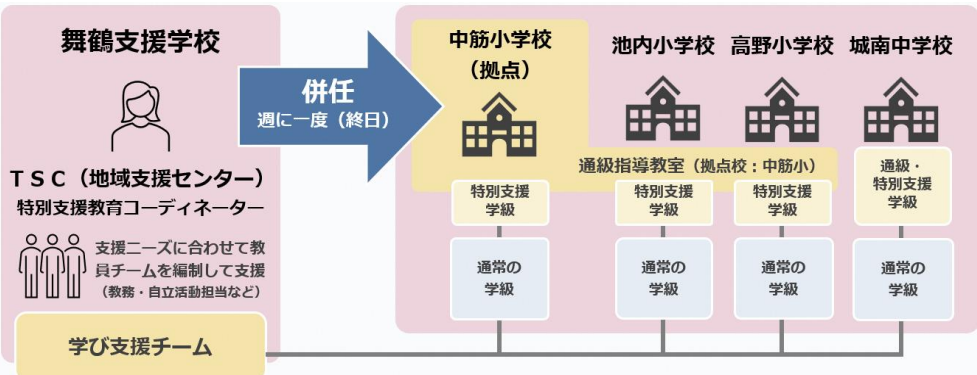
学年等	教科等	内容	指導方法の工夫等
小1年生	・体育 ・生活/生活単元	・ホップステップ運動会(運動会種目を通じた発表・体験) ・あきとなかよし(秋見つけ、木の実のおもちゃ)	・本時の流れ等を黒板やホワイトボードに提示し、見通しを持たせる。 ・活動内容を絵カードや写真、パワーポイントで視覚的に分かりやすく示す。
小2年生	・国語	・あきいっぱい(言葉の特徴や使い方、書くこと)	・コーンを置く、コースを示す、色違いのフープで立ち位置を示すなど、場所を明瞭化する。
小4年生	・社会/生活単元 ・音楽	・社会科見学交流(社会見学や遠足の発表会) ・オーラリー(リコーダー「オーラリー」、共同での音楽づくり等)	・リコーダーが苦手な児童はスライドリコーダーや簡単な楽譜を使用し、同じ曲を演奏できるようにする。
中1年生	・国語 ・音楽	・書道(硬筆/毛筆、書くこと) ・合奏、ダンス	・3人程度の小グループやペアを作り、相談や協力がしやすいサイズにする。 ・一緒に体を動かして体感しながら概念をつかめる共同的な活動を工夫する。(リズムなど)

② 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

◇ 特別支援学校の教諭が、設置者の異なる地域の小学校に週1日勤務する「併任」を実施し、小・中学校における特別支援教育の充実に向けた校内体制の在り方について、実践的に研究

⇒ 通常の学級における授業のユニバーサルデザイン化や、通級指導教室と通常の学級との連携、特別支援学級での自立活動の共同指導、特別支援教育の視点の共有、校内支援委員会への出席やケース会議でのアドバイスなど

◇ 併任の学校以外にも、交流及び共同学習で築いた関係性から、ニーズに応じて柔軟に支援を実施する「学び支援チーム」を展開



- 校内や関係機関との連携・調整の活性化
 - ・特別支援教育Coや通級指導担当者、地域の関係機関との連携・調整を活性化
- 授業づくりの支援、特別支援教育の視点の共有
 - ・「自立活動」の授業づくりにおける協働(T1,T2として)
 - ・通常の学級におけるUDLの視点からの授業改善
- 校内体制への日常的な参画、体制の充実
 - 校内支援委員会やケース会議への参加
 - 校内研修の実施(個別の指導計画 作成と活用)



本事業の成果(事業2年次)

(1) 交流及び共同学習の深化と質の向上

2年次のテーマ「つながり合う」のもと、前年度の「知り合う」関係を土台として、単発の行事交流から、各校の教育課程(理科、音楽、図工、総合的な学習の時間等)に明確に位置づいた「共同学習」へと質的な転換を図った。

◇共同的な授業設計とチーム・ティーチング

新たに導入した「つながるシート」やTeamsを活用し、両校の教員が事前に目標、手立て、引き出したい姿や配慮点を共有した上で授業づくりを行う体制が構築された。これにより、校種を越えた一体的なチーム・ティーチングや教員間での専門性の学び合いが進んだ。

◇児童生徒の変容と双方向の学び

児童生徒の関係性が「お客様」から「対等な仲間」へと深化し、名前で呼び合う姿や継続的な交流を期待する姿、共に考えたり議論する姿が生まれた。また、支援学校の児童が知識を生かして「教える側」に回るなど、一方的な支援ではない双方向の学びが実現した。

(2) 「学び支援チーム」および「併任」による指導体制の構築

特別支援学校のセンター的機能をより伴走型で発揮させるため、支援学校教員が拠点校(中筋小学校)へ週に1回勤務する「併任」制度を活用した実践研究を行った。

◇伴走型支援の実践

外部からの巡回相談とは異なり、校内支援委員会への参画や日常的な授業への入り込みを通じて、地域の学校における特別支援教育やUDLの視点からの授業改善の充実が進んだ。また、通級指導教室と通常の学級との連携や、日常的な情報共有などの校内体制が活性化。

前年度からの
変化・改善点

- ・ 行事的な交流から、教科等の共同的な学びへの深化と、双方の教員の共同での授業設計ツールの導入
- ・ 「併任」および「学び支援チーム」の展開による、設置者や校種を越えた一体的な指導体制の整備

課題

- ・ **取組の持続可能性と負担感**
多くの交流及び共同学習を行う一方で、移動に係る交通費(タクシー・バス代)の増大や、綿密な打ち合わせ等の多忙感が課題となっており、量的な拡大と質の維持のバランスが問われている。
- ・ **校内支援体制のモデル的整理**
伴走型の支援体制が構築されつつあるが、その成果が特定の教員のスキルや熱意に依存している側面は否めない。併任や特定の個人ありきではない、システムとして機能する組織的な体制を定着させることが必要である。
- ・ **関係性の継続に関する課題**
特に特別支援学校の学級編成(複式学級)の都合上、年度が変わると集団が変わり、築いた学級同士の関係性がリセットされてしまうことや、中学校段階において教科の専門性が高まるにつれ、共同学習の接点を見出すことが難しくなる等の課題がある。

今後の展望

- ・ **取組の焦点化・重点化:**教育効果が高く、無理なく継続できる取組を分析し、質の高い交流及び共同学習をシステムに定着させる。
- ・ **「副籍モデル」の実践的検証:**居住地の学校に副次的な籍を置く「副籍モデル」の導入シミュレーションを行い、地域で一体的に子どもを育てるシステムの在り方を研究する。
- ・ **府内への波及:**事業終了後も発展するインクルーシブな学校運営モデル(舞鶴モデル)を確立し、府内全域への発信・波及を目指す。